

【学会レビュー】

環境アセスメント学会・日韓ワークショップ

伊 藤 勝

日韓ワークショップは、環境アセスメント学会の国際交流委員会が主体となり、韓国のカウンターパートと隔年開催とし、学会活動の一翼を担っている。環境アセスメント学会とはどのような学会であるか、なぜ国際交流委員会なのかを説明した後、ワークショップに関して言及する。

1. 沿革

環境アセスメントを主眼においた研究活動組織として、1997年に国際影響評価学会（IAIA: International Association for Impact Assessment）の日本支部が設立された（会長 原科幸彦・東京工業大学教授）。その年に明海大学浦安キャンパスにおいて設立総会と研究発表会が開催され、テーマは「環境アセスメントの新潮流」であった。その後、「環境アセスメント法がもたらすもの」、「環境政策の転換点」、「干潟の保全と環境アセスメント」のテーマの下に、例年の研究発表会を開催し、2001年には江戸川大学において、「住民主体の環境アセスメント」をテーマとし、映像ホールにて研究発表会が開催された。

他方、『1999年、環境影響評価法が全面施行され、全ての都道府県・政令指定都市で環境アセスメントに関する条例が制定された。環境アセスメントの概念は大きく広がり、国際的な意見交換も活発に行われるようになった。様々な分野の専門家や環境アセスメントの実務者、市民やNGOも含めた多様な人々が、「環境アセスメント」という一つのテーマの下に交流を深め、互いに切磋琢磨し、環境アセスメントの学術・技術等の水準を向上させることが求められていることから、持続可能な社会の構築に寄与するため』（設立趣旨書

を改変）、環境アセスメント学会が2002年4月に設立された（初代会長 島津康夫・名古屋大学名誉教授）。この段階で、前述のIAIA日本支部は環境アセスメント学会と一体化し、国際交流を担うべく委員会を設け、活動することとなった。

2. 展開

環境アセスメントの根源性や時代性を見定めながら、研究発表会におけるシンポジウムのテーマを決めるとともに、根幹的な研究成果や情報の共有を図るため、制度研究部会、生態研究部会、事例研究会などの研究活動を実施している。また、情報や意見交換を目的とする「サロン」と称する会合も適宜開催されている。

以上のような基盤的活動の上に、例年研究発表会が開催され、学会として掲げるテーマと、開催地の地域性を考慮したテーマのシンポジウムを同時に開催している。最初の研究発表会でのテーマは、「環境アセスメント学会に期待するもの」と「生態系アセスメントの課題と展望」として、2002年9月に、千葉・三番瀬を視野に、明海大学浦安キャンパスで開催された。2003年は、東京工業大学すずかけ台キャンパスにおいて、制度への視点から、「方法書のあり方を問う」というメインテーマの下に、「方法書段階の住民参加と事業者の説明責任」、「沖縄軍用空港」と「木曾川左岸道路」を事例に活発な意見交換がなされた。

2004年には、沖縄大学にて開催し、桜井国俊・沖縄大学学長をコーディネーターとし、「沖縄の開発と環境アセスメント」の現地シンポジウムを実施した。このシンポジウムでは、吉田正人ライフデザイン学科教授が「沖縄の環境をどうとらえ

るか」の報告をされた。学会シンポジウムとしては「撤去と再生のための環境アセスメント」とし、開発からの脱却、後始末の時代の環境アセスメントへの展望を挙げた。2005年には、法の改正と愛知万博の紆余曲折、中部国際空港を視野に、愛知学院大学日進キャンパスにおいて、「新アセス法は生かされるか——東海地方の事例をもとに検証する——」と「愛知万博の環境アセスメント」のシンポジウムを開催した。

2006年には、武蔵工業大学横浜キャンパスにおいて「景観法時代における環境アセスメント」をシンポジウムのテーマとして開催された。研究発表会は、日韓ワークショップに引き続き行われ、江戸川大学関係者による多数の発表があった。「土壌・生物インベントリー情報の環境アセスメントへの活用」(浜田竜之介前教授他)、「急傾斜地崩壊対策工事が水生生物に与えた影響」(吉田教授他)、「NACS-J 戦略的保全地域情報システム(SISPA)の構築と活用」(吉田他)、伊藤ゼミによる「ミズバショウ湿地の水質調査による維持・管理の有効性評価」(亀山敬子他)、「電車内騒音の調査及び評価の方法論に関する一考察」(吉田真吾他)及び「漏洩高温加圧混合炭化水素のフラッシュ率及び気化ガス拡散の系統的推算法に関する一提案」(伊藤及び積田雄一郎)である。

2007年は9月に明治大学で研究発表会が計画されている。6月にはIAIAの第27回年次大会が韓国・ソウル市で、日韓ワークショップは中国の参加に関する検討を進めつつ、2008年の韓国での開催を計画している。

3. 日韓ワークショップ

第1回は東京、第2回は2004年に韓国・済州島で開催された。第3回のワークショップのテーマは、「撤去と復元の環境アセスメント——日本橋と清溪川 日韓の事例から——」とし、韓国側から12名の参加があった。韓国環境影響評価学会会長 尹瑞成(Yoon Suh Sung)・韓国環境政策評価研究院院長、環境アセスメント学会会長 浅野直人・福岡大学教授の挨拶に引き続き、ワークショップは始まった。

韓国側からは、河川復元プロジェクトが実施されたソウルの清溪川を対象とし、ソウル特別市の李龍太(Lee Lyong Tae)氏から「清溪川復元プロジェクトの内容と推進過程」、韓国国立環境科学院(NIER)の金命振(Kim Myung Jin)氏による「生態型河川復元案に関する一考察」、韓国環境政策評価研究院(KEI)の金知永(Kim Ji Young)氏の「清溪川の復元による環境アセスメント」の3報告があった。

日本側からは日本橋プロジェクトに関する報告と、それを実行するための必要な考え方の2編、計3編の報告があった。中村英夫・武蔵工業大学学長が関わっている「都市再生と日本橋地区再開発構想」、田中章・武蔵工業大学助教授の「生態系アセスメントの展開」、林希一郎・名古屋大学教授による継続的な研究成果である「SEAのアジアでの発展と協力」(注・SEA: Strategic Environmental Assessment)である。

ワークショップは、伊藤がコーディネーターを勤め、進められた。韓国側からは、Lee Sang Don氏(梨花女子大学)、Lee Jong Ho氏(清州大学)、Lee Mu Choon氏(延世大学)、Jung Jong Gwan(忠南発展研究院)、Jung Joon Hwa(株)DAE YOUNG EEC)が、日本側は報告者の3氏が登壇した。

4. ワークショップの要約と結論

清溪川は、都市下水路的な河川としての機能を持たされ、川面は蓋をされ、平面道路と高架高速道路に覆われた「下水川」であった。高架道路の老朽化にともない、「建て替えか、河川への回帰か」が検討され、都市交通機能、都市下水機能の側面からの評価と、清溪川の復元が比較考量された。結果として、「下水道化」されていた清溪川の復元が選択された。この政策の選択によって、例えば都市下水機能の維持・発展のために、新たに下水道2系統が建設された。

この事業に関する環境アセスメントを進めるにあたり、維持管理、政治的判断、市場性などの課題があり、これらの課題解消には、中立的な立場(財団法人)の意見が取り入れられた。その背景

には、ソウル市民が都市生態系の復元を望んでいたこと、SEA（戦略的環境アセスメント）レベルでの考え方を組み込むこと、老朽化高速道路建て替えなどのコストとその転化問題などが挙げられた。意思決定には、市民のリーダーシップが大きく寄与した。残念ながら、SEAの取り組みと定量的生態系評価（HEP）の活用はなかったが、市民委員会の希求した環境や生態系の復元を軸に、折衷案と言われる側面も有するが、復元の計画案が立案され、決定に至った。

膨大な費用が想定され、コスト効果も課題である日本橋地区再開発構想に関しては、復元による環境側面の効果、機能付与計画に左右される経済効果、交通系統への影響など、高次の課題がある。したがって、清溪川の復元プロセスの実績を教訓とし、日本橋再開発の環境アセスメントの出発点はSEAであるべきであるとの合意をみた。然る後、EIA（事業レベルの環境アセスメント）へと進展するべきと意見が集約された。

原則的方向性は示されたが、まだ詰めなければならぬ事柄は山積みである。日韓の政治特性、国民性、法律や行政上の相違などがある。例えば、

韓国環境政策評価研究院は強い権限を保有するが、そのレベルの権限を有する「環境関係の機関」が日本にはないことなどが挙げられる。また、東京には首都移転の議論が底流にあり、都市再生への影響に関するアセスメントは、東京という特殊性も無視できない。つまり、大規模地震災害対策、政治的・経済的一点集中の解消・分散策、高い地価や高度の過密など、都市経営上の政治的、経済的諸課題の存在であることが付言された。

まとめ

日韓ワークショップは、両国の「実際のプロジェクト」に基づき、来るべきアセスメントの姿をSEAに反映させるための方向性を見出す試みでもある。IAIAにおいても力を入れている分野であり、6月のIAIA第27回年次総会においても主要な軸をなしている。前述したように、国情の相違に焦点を当てれば、SIA（社会環境アセスメント）も重要な分野になると思われるが、わが国の環境アセスメントに係わっている人々を総観すると、社会学的側面の「薄さ」が気になっていることを付記し、結語とする。